

新年礼拝 2021年1月3日(日)

題 『生きて行く支え』

テキスト：使徒言行録3章：1～10

クリスマスの光に包まれて2021年の新年礼拝に集えました事をうれしく神さまに感謝します。皆さまとご家族の上に神さまの平安をお祈りいたします。

さて、今日の聖書の個所には、ペンテコステ・聖霊降臨日を迎えて、主イエスにある群れ、つまり教会が地上に誕生した最初の頃に起こった出来事が記されています。エルサレムにあるユダヤ教の神殿でイエスの弟子のペトロが足の不自由な男をいやした出来事です。この年を生きる上で学ぶことのできる個所だと思います。

1:ペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行った。

イエスの弟子のペトロとヨハネも祈るために神殿にやって来たのです。

2:すると、生まれながら足の不自由な男が運ばれて来た。神殿の境内に入る人に施しを乞うため、毎日「美しい門」という神殿の門のそばに置いてもらっていたのである。

美しい門、口語訳聖書や新改訳聖書では「美しの門」となっています。とても豪華で美しい門だったようです。そこでこの生まれながら足の不自由な男が運ばれて来て参拝者に施しを乞うていたのです。神殿の管理者にも何がしかのお金は納めなければならなかったかもしれませんが、この男の人はこうすることで日々生活していたのです。

今日の聖書個所には「見る」ということばが多く出てきます。それぞれニュアンスが異なっているように思えるのです。

3節には、彼はペトロとヨハネが境内に入ろうとするのを見て、施しを乞うた。とあります。境内に入る人は誰でも見て施しを乞うていたのでしょうか。

しかし、4:ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見て、「わたしたちを見なさい」と言ったのです。ペトロとヨハネは、エルサレム教会の代表格の人たちでした。この「じっと見る」とは、強い意味を表す単語が使われています。強い心を感じます。漠然とみるのではなく、この男の存在にしっかりと眼を止めているのです。

5:その男が、何かもらえんと思つて二人を見つめていると、男は明らかに何かをもらえんと期待して見たと思えます。

6:ペトロは言った。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」とこの人に言いました。

ペトロとヨハネは持っているものがあつたのです。それは金や銀ではなく、「主イエスにある命」でした。座り込んでいる男が生きるために必要なことがあることを二人は見抜いていたと思うのです。

金や銀は確かに一時的な力にはなりますが、なくなればそれまでです。今はこの人が立ち上がり生きて行くことが何より大切なのです。

地にうずくまるこの男を見たペトロとヨハネにも思うところがあつたのだと思います。この二人もイエスさまの十字架でもう立てないほどの挫折を味わつたのです。その時、心が、いや魂が倒れたのです。うずくまっていたのです。しかし復活のイエスさまに出会い、立ちあがらされ今はこのナザレの人イエス・キリストの名にすがって生きていたのだと思います。

「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」この言葉が二人の生きる力となつたのです。「イエスの名には、イエスの霊の力がこもっている。」と言われます。名は現代のように単なる記号ではなく、古代には実質的な力を持っていると思われていたのです。

なくてならぬものは神さまが必ず備えてくださるとの信頼をもって、イエス・キリストの名を呼び続けて、その命に与っていたのです。

そして、二人は右手を取って彼を立ち上がらせたのです。

立てなかつた人が、肉体的に立ちあがるには、手をとってあげることが必要です。優しさです。具体的に助けてあげることです。

わたしたちの心をあたためてくれるのは、まわりの人の優しさです。

神さまに造られている人間はみな魂というものを与えられています。心の深くだと思っています。人の優しさはありがたいものですが、この魂がもし壊れたら、人の力や努力だけでは困難なのだと思います。崩れた魂を心を立ち上がらせることは、造り主なる霊なる神ご自身しかできなのです。実は「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、」とは、魂の再生、生き返りの出来事なのです。旧約聖書のエゼキエル書 37 章で谷にうずくまる枯れた骨が神さまの息、霊によって組み合わされ生き返る出来事が記されています。10 節 (p 1357)「わたしは命じられたように予言した。すると、霊が彼らの中に入り、彼らは生き返って自分の足で立った。彼らは非常に大きな集団となつた。」人は神の清き霊を受けて生き返ることができるのです。真に生きるために立ち上が

ることができるのです。年齢や性差などには関係ないのです。ペトロとヨハネも自分自身、魂が壊れるほどの体験をし、それをイエス・キリストが再生してくださった、生き返らせてくださったという感謝と喜びの体験をしたのです。これは主イエスの十字架と復活に与る体験と言えらると思ひます。わたしも、かつてそのような体験をさせて頂いたと思ひています。人の優しいことばは大切でそれは励ましや助けになります。しかし、それで人は救われるのではないのです。苦しみを負ひ、十字架で死なれた、殺されたイエスさまによって人は救われるのです。罪と死からもイエスさまと共にある命、永遠のいのちへと救われるのです。癒されない心の傷の深みに、イエスさまは目を留め、光を当て癒し続けてくださっているのです。これが救ひです。死と罪の支配からの救ひです。解放です。自由です。

神さまはイエス・キリストは、自ら傷を負ひながらも、魂の深みのどん底まで訪ねてくださった方なのです。聖書の言葉はその救ひを伝えてくれています。そして心の絶望状態から、魂の行方（ゆくえ）不明状態から救ひ出し自らの元へ、連れ帰してくださる方なのです。生かしてくださるのです。この男の人も生きてよいのです。

私たちにできることはないのか。

それはあるのです。起きようとする人の「手をとってあげること」です。互いに覚え合ひ、祈り合ひ、助け合ひ、生きていくことです。そこにイエスさまはいてくださり、愛なる神さまは働いてくださるのです。手をとってあげること」これは確かに神に仕える働きで貴い奉仕なのです。ある人は言ひました。「悲しみを経験している人たちが互いに語り合ひ、そこに教会がある。」と。覚え合ひ、祈り合ひ、神さまの救ひの御業は必ず起こって行くのです。コロナ禍で迎えた2021年ですが、神さまの働きを今年もわたしたちの上に見せて頂ひることを楽しみに希望をもって歩み出したいと思ひます。

◆ペトロ、足の不自由な男をいやす

- 1:ペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行った。
- 2:すると、生まれながら足の不自由な男が運ばれて来た。神殿の境内 に入る人に施しを乞うため、毎日「美しい門」という神殿の門のそばに置いてもらっていたのである。
- 3:彼はペトロとヨハネが境内に入ろうとするのを見て、施しを乞うた。
- 4:ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見て、「わたしたちを見なさい」と言った。
- 5:その男が、何かもらえんと思って二人を見つめていると、
- 6:ペトロは言った。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」
- 7:そして、右手を取って彼を立ち上がらせた。すると、たちまち、その男は足やくるぶしがしっかりして、
- 8:躍り上がって立ち、歩きだした。そして、歩き回ったり躍ったりして神を賛美し、二人と一緒に境内に入って行った。
- 9:民衆は皆、彼が歩き回り、神を賛美しているのを見た。
- 10:彼らは、それが神殿の「美しい門」のそばに座って施しを乞うていた者だと気づき、その身に起こったことに我を忘れるほど驚いた。